



RYUKOKU
UNIVERSITY

You, Unlimited



広報誌「龍谷」

2026
VOLUME 101

農学研究科 山田 彩映 さん

Ryukoku

Brand Story

世界は驚くべきスピードでその姿を変え、
将来の予測が難しい時代となっています。
いま必要なことは、「学び」を深めること。
「つながり」に目覚めること。
龍谷大学は「まごころある市民」を育てていきます。

自らを見つめ直し、他者への思いやりを発動する。
自分だけでなく他の誰かの安らぎのために行動する。
それが、私たちが大切にしている
「自省利他」であり、「まごころ」です。
その心があれば、激しい変化の中でも本質を見極め、
変革への一歩を踏み出すことができるはず。

探究心が沸き上がる喜びを原動力に、
より良い社会を構築するために。
新しい価値を創造するために。

私たちは、大学を「心」と「知」と「行動」の拠点として、
地球規模で広がる課題に立ち向かいます。
1639年の創立以来、貫いてきた進取の精神、
そして日々積み上げる学びをもとに、様々な人と手を携えながら、
誠実に地域や社会の発展に力を尽くしていきます。

豊かな多様性の中で、心と心がつながる。人と人が支え合う。
その先に、社会の新しい可能性が生まれていく。
龍谷大学が動く。未来が輝く。

You, Unlimited





広報誌「龍谷」

01 P01 Feature Article

巻頭特集 学長対談

「ワクワクするサステナビリティ」を共創

コクヨ株式会社

CSV本部サステナビリティ推進室室長 龍谷大学学長

横手 綾美 × 安藤 徹

02 P06 Ryukoku News

・キャンパスコンセプト

「コレクティブ・インパクト・プラットフォーム」を設定

・環境サステナビリティ学部(仮称)

・情報学部(仮称)

・共創HUB着工

・文学部の改組

・Welcome Lounge開設

03 P14 People, Unlimited

学内外の交流の場となることもめざして

商学科1期生が「自分たちの店」を企画・出店

溝淵 紗奈 さん 経営学部商学科

P16

好みで選べて誰もが美味しい

農学部オリジナルコーヒーが誕生

山田 彩映 さん 農学研究科修士課程

P18

ゴールは悟り。

煩惱に楽しく向き合うカードゲーム

林 泰誠 さん 経営学部経営学科

04 P20 Education, Unlimited

仏教SDGsの第一歩。

社会課題に気づく眼差しを育む

深尾 昌峰 教授 政策学部

P24

学生と教員が協働する授業づくり

ともに学び、ともに磨く

寺川 史朗 教授 法学部

大西 春叶 さん 文学研究科修士課程東洋史学専攻

05 P28 Research, Unlimited

探し求めていた自然共生と実証実験の拠点として
古民家と田畑を再生

大石 尚子 教授 政策学部

P32

VRで無限の創作、新たな表現を実現

芸術と技術が融合した「ダンス&テクノロジー」

曾我 麻佐子 准教授 先端理工学部

06 P36 Event Ryukoku Museum

初公開の名宝も多数

真如堂の知られざる魅力に迫る

石川 知彦 龍谷ミュージアム副館長

07 P38 Connect, Unlimited

龍谷大学をつなぐ対談

気候変動を自分事に。学生主体の気候会議が

ゼロカーボンユニバーシティを推進

政策学部

文学部

の場 信敬 教授 × 宮木 朝寛 さん

08 P42 My Campus

マイキャンパス

09 P44 News & Topics

最新情報

10 P49 Book Café

新刊紹介

01

Feature Article 巻頭特集 学長対談

ココヨ株式会社
CSV 本部サステナビリティ推進室室長 横手 綾美 × 龍谷大学学長 安藤 徹



「ワクワクするサステナビリティ」を共創



横手 綾美

コクヨ株式会社CSV本部サステナビリティ推進室室長。2004年コクヨ株式会社入社。ワークスタイルコンサルタント、ワークプレイス設計者としてオフィス構築案件を多数担当。2021年よりCSV本部サステナビリティ推進室へ。循環型社会の実現に向けたコンセプト立案や、プロジェクト推進をする他、コクヨグループの社会価値創出ロジックモデルの整理、サステナブル経営企画を担当。2026年室長に就任。

今回、安藤学長が対談したのはコクヨ株式会社の横手綾美サステナビリティ推進室長である。「龍谷大学基本構想400」のもと持続可能な社会に繋がる教育・研究・実践を推進し、2027年4月「環境サステナビリティ学部(仮称)」を開設予定^{*}の本学と、自律協働社会の実現に向けてサステナブル経営を加速させている同社は、その理念において深く響き合う。今後の連携も視野に双方の取り組みを語り合った。

安藤:コクヨといえば「キャンパスノート」をはじめ学生や教職員の学ぶ・働くに欠かせない身近な存在であり、未来を見据えたサステナブルな取り組みに注力されていることにご縁を感じていました。

横手:木質材料を活用して事業展開している私たちは、長年、環境影響の最小化に取り組んできました。時代がエコからサーキュラーへ変化したことから、「捨てる」概念をなくして循環型社会に貢献する「SUTENAI CIRCLE (捨てないサークル)」を2023年から事業横断の取り組みとして推進しています。この“循環の輪”はモノを作る・使う・回収する・再利用することですが、私たちだけでは成立しません。お客様にも輪に入っていただき、捨てない社会をとともにめざすものです。

安藤:生産から消費へという「動脈」だけでなく、消費から再生へという「静脈」も融合して循環させていくということですね。

横手:取り組み開始当初「日本国民の16%の行動を変える」という目標を掲げました。キャズム理論では、市場の16%を超えれば新たな商品や仕組みは社会に浸透するといわれています。キャンパスノートは累計販売数38億冊(2025年時点)に達しており、世代を超えて

使用されてきました。だからこそ、私たちにできる役割があるのではないかと考えました。この一環で、使い終わったノートを子どもたち自身に回収してもらい、私たちがノートとして再生し再び使ってもらう「つなげる一歩!」という環境学習プログラムを全国の小学校でおこなっています。文房具は子どもが初めて自ら所有し、消費するものです。これを捨てるのではなく、資源として再び使うことが定着すれば、循環型社会の実現の力になると思います。

安藤:本学では、「基本構想400 第2期中期計画」に「サステナビリティへの『旅』—変革の加速へ—」を掲げ、教育・研究・社会貢献における体験×共創×挑戦を通じて、環境変化への対応と変革の促進に取り組んでいます。貴社では「共感共創」という強みを活かして社内外に循環の輪を広げる活動を推進されています。小学生とのプロジェクトもそうですが、やはり「共創」が大切な鍵になりますね。

横手:社内では社員が重要課題を自分事とし、自律的な行動を促進する学びの場「サステナブル・アカデミア」を定期的に開催しており、「ワクワク」する発見がある事を大事にしています。昨年は自社の社会価値・環境価値・経営価値をめぐる謎解きゲームを企画しました。現在、社員の約80%が「社会価値を生み出すことに貢献できている」と思うなど成果が表れています。私たちは挑戦することを評価する文化を大切にしているので、この項目でも100%を目標に設定しています。

安藤:野心的なストレッチゴールは個々のモチベーション向上や組織のポテンシャル開拓に効果的です。「エンジョイ・サステナビリティ」というのでしょうか、楽しくワクワクとした気持ち取り組みの継続に不可欠です。



安藤 徹

1968年岐阜県生まれ。名古屋大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程修了。専門は日本古典文学、特に『源氏物語』をはじめとする平安朝文学。著書に『源氏物語と物語社会』（森話社）など。2000年に龍谷大学文学部に着任。2017年より4年間文学部長を務める。その後、副学長・龍谷ミュージアム館長を経て、2025年4月に第20代学長に就任。

横手:コクヨでは2006年から高知県に流れる四万十川のほとりで「結の森プロジェクト」に取り組んでいます。日本の森の約4割は木材を原材料として使うために育てられてきた人工の森です。そのため、間伐やその間伐材の利用、植林といった人の手による手入れをおこなわなければ森は荒廃してしまいます。

安藤:本学の瀬田キャンパスに隣接する「龍谷の森」という里山でも、実習や研究などを通じて人の手を加えながら保全と新たな価値創出に取り組んでいます。サステナビリティをめぐるのは「人間中心主義」が自然破壊を招いたとの意見もありますが、「結の森」や「龍谷の森」のように人間を自然から切り離して考えるのではなく、いかに共存し、統合的に課題を解決していくかが求められます。

横手:同感です。私は人間は自然の一部だと思っています。自然に影響を与え課題を生み出してきた一方で、人間は課題を解決する知恵も持っているのではないのでしょうか。

安藤:文学を研究する身として、「言葉の力」も信じています。水筒を「マイボトル」と言い換えたことが、自然に負荷をかけない行動変容を促したのはよい例です。

横手:確かにそうです。ゴミや廃棄物を「捨てるもの」から「資源」と捉え直し、循環の必要性を言葉で伝えていくことは非常に重要であり、人を動かし、社会を変えることに繋がると考えます。

安藤:本学は2027年4月に「環境サステナビリティ学部(仮称)」を開設予定^{*}です。都市環境工学×生物多様性科学×経済・経営学という文理複眼的で実践的な学びによって、環

境問題はもちろん、社会課題や経済活動を解決するグリーン人材を育成・輩出していきます。

横手:日本の大学にもついにサステナビリティを専門的に学べる学部が誕生することには期待しかありません。教育は未来を変える力になります。企業や社会は専門的な知識と実践力を備えた人材を求めているので、環境サステナビリティ学部(仮称)で専門性を養った学生のみなさんが環境課題の解決をリードしてくれることをうれしく思います。

安藤:ありがとうございます。多様なグリーン人材という文脈から、コクヨが掲げる「森林経営モデル」にも着目しています。

横手:文房具事業はもちろん、多様な事業が成り立ち、数多くの価値を生み出す森林のような経営モデルをめざしています。このモデル図を示すと「森に種を蒔く鳥のような役割が必要」「土を耕す虫のような人も大切」と社員の発想が広がっていったことには驚きました。

安藤:総合大学である本学も同じです。全学部が横断的に繋がり、多様な専門性が混ざり合うことで、複雑な社会課題の解決に貢献する教育や研究、地域社会との協働・共創を成し得るのだと思います。

横手:コクヨは2007年から琵琶湖の葦(ヨシ)を刈り、紙製品にする活動を続けています。こうした活動についても、今後、龍谷大学の知見や人材と関わりながら進めていける可能性があるのではないかと感じています。

安藤:研究の社会実装は大学の重要な使命です。サステナビリティの実現に向けて、協働・共創・挑戦を続けていきましょう。



「コレクティブ・インパクト・プラットフォーム」を掲げ、3キャンパスの名称を変更

新たなキャンパスコンセプトで 社会課題解決を推進

龍谷大学は、社会課題解決を加速するため、「コレクティブ・インパクト・プラットフォーム」を新たなキャンパスコンセプトに掲げます。コレクティブ・インパクトとは、多様なセクターがそれぞれの強みを活かしながら協力するアプローチのことです。現代の複雑な課題は、単独の組織だけで解決することが困難であり、共通の目標のもとに多様な主体が連携し続ける仕組みが求められています。本学は、多様な人が集い、共創と挑戦が続く場となることをめざし、この新たなキャンパスコンセプトを推進します。

このコンセプトに基づき、2027年4月に3キャンパスの名称を変更します。「深草キャンパス」を「京都深草キャンパス」、「大宮キャン

パス」を「京都大宮キャンパス」、「瀬田キャンパス」を「びわ湖大津キャンパス」に改称し、それぞれを価値創造、未来創発、共創先導の拠点と位置づけます。

びわ湖大津キャンパスでは、2027年4月に「環境サステナビリティ学部(仮称)」と「情報学部(仮称)」を開設予定[※]。環境サステナビリティ学部(仮称)は文理の枠を超えて次世代の環境人材を育成し、情報学部(仮称)は実践力・応用力を備えた情報人材を育成します。両学部の設置を皮切りに、びわ湖大津キャンパスがキャンパスコンセプトの実現を先導します。

さらに2028年4月には、京都駅前に「共創HUB京都(仮称)」がオープンします。学び・挑戦・住まいを兼ね備えたイノベーションハブ拠点として、産・学・金がリソースやネットワークを活用し、新たな共創を創出します。居住



学生に限らず、教育・研究・社会連携活動の場として広く活用し、コレクティブ・インパクトの創出を一層推進します。

これまで本学は、コレクティブ・インパクトの実践に積極的に取り組んできました。2013年には、金融機関や企業、地域と連携して運用する全国初の地域貢献型メガソーラー「龍谷ソーラーパーク」を設置。売電利益は地域へ還元されるとともに、学生による社会連携活動の資金として活用されています。2021年には、龍谷大学ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンターを中心に複数の信用金庫と連携し、「ソーシャル企業認証制度」の運用を開始しました。教員、学外有識者、学生で構成される第三者認証委員会は、2026年2月時点で累計1,597社を認証し、企業活動の社会的インパクトの可視化とエコシステム構築に貢献しています。また、「京都市脱炭素先行地域

推進コンソーシアム」のグリーン人材ワーキングのリーダー会員や、滋賀県の「しがネイチャーポジティブネットワーク」に立ち上げ団体として参画するなど、その理念を体現しています。

龍谷大学の歴史は、1639年に西本願寺に設けられた「学寮」に始まります。2029年には創立390周年を迎え、「京都大宮キャンパス」は150周年、「びわ湖大津キャンパス」は40周年、2030年には「京都深草キャンパス」が70周年を迎えます。京都と琵琶湖に根差す3キャンパスは、これからも地域や企業、自治体との連携を深化させ、コレクティブ・インパクトを創出しながら社会に貢献していきます。

※設置計画は予定であり、内容に変更が生じる場合があります。

本物のフィールドで、本物の実践力を。

Discover More Design More

龍谷大学 環境サステナビリティ学部 (仮称)

2027年4月開設予定 (設置構想中)

設置計画は予定であり、内容に変更が生じる場合があります。



Connect More Impact More

未来をカタチに変え、リードする力を。

龍谷大学 情報学部 (仮称)

2027年4月開設予定 (設置構想中)

設置計画は予定であり、内容に変更が生じる場合があります。

環境サステナビリティ学部(仮称)

実践的に課題解決に向き合える次世代の環境人材を育成

2027年4月、瀬田キャンパスに新たに「環境サステナビリティ学部(仮称)」を開設[※]します。建学の精神を礎に、サステナビリティをめぐる幅広い知識を身につけるとともに、都市環境工学、生物多様性科学および経済学・経営学に係る専門知、並びにそれらを統合した視点を獲得し、持続可能な社会の創造に向けて、実践的に課題解決に向き合える環境人材を育成します。

学びの特色

クエスト科目群～五感で学ぶ「自然環境の中での原体験」～

環境サステナビリティ学部(仮称)では、「体験して、問い、動いて、つなげる」学びを、4年間で何度も循環させるのが特徴です。講義で得た知識を現場で確かめ、現場での気づきを講義に持ち帰る、循環型の学びです。文系・理系を問わず、全ての学生が「考える力」「動く力」「つなぐ力」を身につけ、ネイチャーポジティブ時代の社会で活躍できる人材へ成長します。

体験・共創型PBL「クエスト科目群」では、滋賀県が誇る琵琶湖をはじめ、国内外に実習フィールドを準備しています。リアルな自然環境の中に飛び込み、自然がもたらす価値について、実際に五感(見て、聞いて、触れて、感じて、楽しんで)を通じた学びを体験します。

専門性を深める5つの「専門教育プログラム」

都市環境工学・生物多様性科学および経済学・経営学など、複数の切り口からあなたの得意分野や興味にあわせて学びを選び、サステナブルな社会を切り開きます。

地域デザインプログラム

地域コミュニティに着目し、自然資本をベースとした地域の資本や地域経営について学び、地域の資本を適正に認識して持続的に発展していけるように地域をデザインする方策について考えます。

ネイチャーポジティブ経営プログラム

企業などの組織に着目し、生物多様性の定量化方法や生物多様性喪失が組織経営に及ぼす影響について学びネイチャーポジティブを組織経営に連接させる方策について考えます。

生物多様性回復プログラム

生態系とそれを支える生物多様性、さらには社会経済活動との相互作用について学び、生物多様性の保全・回復と社会経済活動との共存方策について考えます。

資源循環利用プログラム

社会経済活動に伴って排出される廃棄物に着目し、廃棄物廃棄の適正化や資源としての循環再利用について学び、循環経済の実現方策について考えます。

持続的水資源管理プログラム

全ての生命を支える水資源に着目し、水環境保全や水資源利用に係る技術的、社会経済的システムについて学ぶとともに、持続的な水資源管理のあり方について考えます。

環境サステナビリティ学部(仮称)特設サイト
<https://www.ryukoku.ac.jp/newf2/>



※設置計画は予定であり、内容に変更が生じる場合があります。

環境サステナビリティ学部(仮称)の概要

学部名称	学科名称	学位	入学定員	編入学定員 <3年次>	収容定員
環境サステナビリティ学部	環境サステナビリティ学科	学士(環境サステナビリティ学)	130人	2人	524人

※先端理工学部環境科学課程における教育・研究実績を踏まえつつ大幅に発展

情報学部(仮称)

情報と社会課題を掛け合わせた学びで、「実践力」と「応用力」を有する情報人材を育成

2027年4月、瀬田キャンパスに新たに「情報学部(仮称)」を開設^{*}します。建学の精神を礎に、情報技術と人、社会、自然との調和を重視し、幅広い教養と情報学の基礎知識・技能を修得することで、実践的な専門家として情報社会の発展に寄与し、新しい社会の創造にも積極的に携わる情報技術者を育成します。

学びの特色

低年次から研究を体験する未来共創ラボ演習

実践力・応用力を備えた情報人材の養成のため、実践型演習として低年次から研究を体験する「未来共創ラボ演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を開講します。「情報」に様々なテーマを掛け合わせた社会課題解決型の研究テーマについて、教員と学年が異なる学生と協働して学びます。

例えば、「情報×健康」では、睡眠に関する様々なデータを活用してAIによる分析を行うことで、豊かで健康的な生活の実現に向けた提案ができる能力を育成します。さらに、「情報×製造」では、AIやプログラミング、データといったデジタル技術を駆使し、高品質な製品の開発、効率的かつ柔軟な働き方の実現、安全で持続可能な製造プロセスの構築を支援するスキルを養成します。

多様な学びを体現する3専攻分野

興味・関心に応じて情報学の学びをデザイン

情報学部(仮称)では、情報技術の基礎から応用に至るまで幅広く学ぶことができます。3つの専攻(情報メディア専攻、知能情報システム専攻、実践データサイエンス専攻)を設け、学生が学びをイメージしやすく、それぞれの志向性に応じた体系的な履修を可能としています。学生は選択した専攻に応じた科目を主としつつも、専攻区分を問わずに他の専攻科目も履修することができ、自専攻の学びを軸にしなが、多様な領域の技術や課題解決方法を身につけることで、専門領域における常識にとらわれない柔軟な発想力を修得できます。

情報メディア専攻

画像や音声などのメディア処理に加え、CGやVR、XR技術、ゲームやインタラクティブコンテンツのデザイン手法について体系的に学びます。モーションキャプチャなど多様なセンシング技術やAIの普及を踏まえた次世代のメディアを設計・開発・分析する力を養います。

知能情報システム専攻

データベースやネットワークシステム、ソフトウェア工学など情報システムの基盤技術に加え、人工知能(AI)や機械学習などの技術を応用した次世代の知能化された情報システムの設計・開発について体系的に学びます。

実践データサイエンス専攻

オープンデータや蓄積された膨大なデータを基に、データ思考の課題発見力や課題解決力を養います。データの可視化、統計解析、機械学習などの技術を駆使して、課題解決につながる予測モデルの構築や新たな価値・サービスの創出について体系的に学びます。

^{*}設置計画は予定であり、内容に変更が生じる場合があります。

情報学部(仮称)特設サイト
<https://www.ryukoku.ac.jp/newf1/>



情報学部(仮称)の概要

学部名称	学科名称	学位	入学定員	編入学定員 <3年次>	収容定員
情報学部	情報学科	学士(情報学)	130人	3人	526人

^{*}先端理工学部 知能情報メディア課程における教育・研究実績を踏まえつつ大幅に発展

JR京都駅近くにイノベーションハブ拠点「共創HUB京都(仮称)」着工

—社会課題解決や価値創造をキーワードに、これまでにない共創空間を提供—



大阪ガス都市開発、京都信用金庫、龍谷大学の3者で構成する「共創HUB京都コンソーシアム」は、JR京都駅の近くに、産学金連携と住居を備えたイノベーションハブ拠点「共創HUB京都(仮称)」を2025年11月に着工しました(2028年春開業予定)。「共創HUB京都(仮称)」は、京都信用金庫の支店機能や、龍谷大学のサテライトキャンパス、交流型の学生寮および賃貸マンションなどを備え、各者が有するリソースやネットワークを駆使し、「学ぶ」「挑戦する」「住む」の3本の柱を据え、社会課題解決に繋がる産業創出やコミュニティ形成、人材育成などを推進します。一人の「きづき」が「学ぶ」「計画」「試行」そして「挑戦」へと続き、新たな「きづき」を生む。「誰もが、社会をよくする力を持っている」をコンセプトに、誰もが持つ「きづき」を起点に、社会課題解決や価値創造に繋げていく施設をめざします。

1階・2階には「QUESTION京都駅前(仮称)」を設置。地域の起業家を支援するスタートアップ支援に特化したコミュニティ・バンク京信の支店機能を設け、シェアオフィスやプロジェクトスペースを含むコワーキングスペース機能も備えます。3階・4階には「龍谷

Unlimited Lab(仮称)」。龍谷大学の多様な学問領域を交流・融合させ、社会変革や価値創造を牽引する人材を育成します。社会人、起業家が集う本拠点の特色を活かし、社会課題解決やソーシャルビジネスの創出に寄与するアントレプレナーシップ教育を進めます。龍谷大学の学生に限らず、付属平安高校・中学校の生徒や他大学生、社会人にも広く開放し、従来型の大学キャンパスでの展開を超えた「新しい学び」や「成長」の機会を提供します。また、3階に設ける食堂では、食事の提供のみならず、「食」や「農」に関する教育・研究活動を発信します。5階・6階には交流型学生寮を設置し、入居学生のリーダーが寮の運営に携わる「RAプログラム」を導入。志を持った学生が飛躍を遂げる新しい学生寮をめざします。7階・8階には起業家、会社員、その他多様な入居者が集う交流型賃貸マンションを配置します。これらの住居エリアと1階から4階の共創空間とが連携し、「学び」や「挑戦」の機会を提供することで、入居者がここで成長しながら、豊かな人的ネットワークを形成できる環境を提供します。

共創HUB京都(仮称)Webサイト
<https://k-hub.kyoto>



2027年4月、文学部が改組 学びの幅を広げ、仏教の視点から社会課題に取り組む

龍谷大学文学部は、真宗学科・仏教学科を統合し、2027年4月に新たに「仏教学科」を設置します。

新たな仏教学科では、「真宗領域」「仏教領域」に加え、社会課題に取り組む「社会応用領域」を設け、3領域を横断する融合型の学びを展開します。つながりの希薄化や社会的孤立など既存の枠組みでは解決が難しい多層的課題に直面している現代社会において、「自省利他」を行動哲学に掲げ、仏教SDGsを推進してきた本学は、仏教の現代的価値を見出し、仏教の視点から社会課題に取り組むべく、「社会応用領域」を設置します。同領域では、真宗・仏教の学びを基盤にPBL等を用い、「国

際」「福祉・医療」「文化」を軸に新たな価値創造をめざします。

あわせて、歴史学科東洋史学専攻では「ユーラシア東部地域史コース」「ユーラシア西部地域史コース」を導入するとともに、本学の研究資源である大谷探検隊コレクションに代表されるアジアの考古学・美術史分野を包含する「ユーラシア地域の考古学・美術史分野」を新設。

歴史学科文化遺産学専攻では民俗学を包摂する「無形文化遺産学」を新設し、有形・無形の両面から体系的に学ぶことができるようになります。

2026年4月、深草キャンパス・大宮キャンパスに 新たな龍谷大学体験空間「Welcome Lounge」を開設

龍谷大学は、長期計画「龍谷大学基本構想400」に基づき、学びと交流が広がるキャンパス環境の整備を進めています。その一環として、2026年4月、深草キャンパス及び大宮キャンパスに龍谷大学を体験する新たな空間「Welcome Lounge」を開設します（瀬田キャンパスは夏ごろ予定）。「Welcome Lounge」という名称は、「Welcome（迎え入れる）」と「Lounge（くつろぎの場）」を組み合わせたものです。シンプルで親しみやすく、それでいてモダンな響きを持ち、訪問者も学生も心地よく過ごせる空間を象徴しています。Welcome Lounge は、中高生や卒業生、地域住民、企業関係者など多様な来訪者を迎え入れると同時に、在学生の日常利用にも対応したコミュ

ニケーション空間です。偶然の出会いを大切に「余白」を備え、発見や探求、共感など、さまざまな体験が自然に生まれる場をめざしています。

館内では、大学の歴史や学生の挑戦を紹介する展示を通じて、これまで受け継いできた「伝統」と、新しい学びや挑戦に取り組む「進取」の姿勢を体感できます。交流、展示、居場所といった複数の機能を集約し、時間の流れを心地よく感じられる設えや、歴史と現在が交差する時空体験も提供します。インクルーシブかつサステナブルな設計のもと、誰もが心地よく過ごせる空間として、龍谷大学への理解と関心を広げ、新たな行動やつながりを生み出す場として育てていきます。



深草キャンパス和顔館1階

龍谷大学の現在の姿をブランドイメージとともに発信し、インクルーシブな内装で、誰もが心地よく過ごせる現代的な空間としてデザインしている。

展示では、1639年に本学の起源である「学寮」が創設されてから現在に至るまでの歩みを、写真やイラストを用いて紹介している。

また、龍谷大学が取り組むブランディング活動やサステナビリティの取り組み等に関する展示も行っている。



大宮キャンパス東翼1階

龍谷大学の歩みを主な出来事とともにわかりやすく伝え、内装はクラシカルな雰囲気で、伝統や歴史を感じられる空間としてデザインしている。

展示では、大宮キャンパスの建物に見られるアーチ窓をモチーフに、1639年に本学の起源である「学寮」が創設されてから現在までの歩みを複数の時代に区分し、それぞれの時代のトピックとともにわかりやすく紹介している。

また、貴重書や龍谷ミュージアムに関する展示も行っている。



「RYUKOKU 秋彩(あきさい)マーケット」での様子

03 People, Unlimited

経営学部商学科1年生
クラーク記念国際高等学校出身
溝淵 紗奈 さん

学内外の交流の場となることもめざして 商学科1期生が「自分たちの店」を企画・出店

2025年4月に経営学部の新設された商学科が11月20日と27日の両日、深草キャンパスで「RYUKOKU 秋彩(あきさい)マーケット」を開催した。これは商学科の実践型科目「プロジェクト入門」の一環であり、受講生全員が32チームに分かれ、地域の特産品や小物を販売した。「商い」のリアルを体感的に学ぶことを目的に、店舗の企画から商品選定、仕入れ、価格設定に至るまで、全てのプロセスを学生が実践した。

「志望していた龍谷大学に商学科ができたことはマーケティングに関心を持っていた私にとって大きな喜びでした」と語る溝淵紗奈さんは、このプロジェクトを特に楽しみにしていた一人。事前調査として訪れた商学科の眞鍋邦大准教授のゼミが主催した学外イベントでは、来場者と店舗の出店者が交流を図る姿に感銘を受け「私たちもこの温かな空間を作りたい」と意欲が一段と高まった。溝淵さんのチーム6名は、“らしさ”にこだわった。中国人留学生のメンバーの提案から日本に広まっていない中国の飲み物の販売を決めたが「価格設定において、商品の希少性から高めにとの意見と、高いと売れないとの意見に二分し、難航しました」。チームはプロジェクトの担当教員の鈴木美央准教授(商学科)に相談。

「モノだけでなく、技術や体験といったコトも提供できる」との助言からメンバーの特技である「手相占い」を購入特典とし「来場者には『占い付きでこの値段はお得』と感じてもらい、用意した商品はほぼ売れました」

溝淵さんたちと同様に他のチームもインターン先の企業や自治体のPRを兼ねて商品を販売したり、家業の飲食店と提携したりと趣向を凝らした結果、2日間で延べ900人近くの来場者を集めた。「めざした来場者と出店者の交流も随所でおこなわれていて、うれしかったです」

溝淵さんはチームでの活動と並行してプロジェクト全体の学生運営チームにも立候補して参加。店舗設営や来場者へのインタビュー調査を担当した。「忙しかったですが、SNSでの情報発信やチラシ作成などメンバー個々の強みを活かした役割分担や迅速な情報共有など協働の大切さを体感できました。一方で店舗の収支の読みが甘かったので、会計学や経営学の学びに力を入れていきたいです」と今回の収穫と課題を語る溝淵さん。次年度も運営チームに参加し、後輩のサポート役を務める予定だ。「商学科の伝統を築いていくために、経験を繋いでいくことが1期生の重要な役割だと思っています」



2つの袋を縦に並べると1本の木に見えるパッケージデザイン



「オリジナルブレンドコーヒー2種セットROOT | LEAF」

龍谷メルシー・オンラインショップにて販売

<https://store.shopping.yahoo.co.jp/ryukokumerci-online/rm-n001.html>

読者アンケートのプレゼントとしても登場。詳しくはP.51へ

好みで選べて誰もが美味しい 農学部オリジナルコーヒーが誕生

生産者や企業との連携、学生が育てた農産物の活用などによって美味しいものを開発している農学部にもまた新しい商品が生まれた。オリジナルブレンドコーヒーのドリップパック「ROOT(ルート)」と「LEAF(リーフ)」である。植物の根を意味するROOTはコーヒーが苦手な人に向けたもので、この一杯をきっかけにコーヒーの魅力が根づいてほしい、植物の葉を意味するLEAFはコーヒーが好きな人が木の枝葉のようにコーヒーの世界を広げてほしいとの思いが込められている。開発のきっかけは農学部入門ゼミの外部講師として花陽みく氏がおこなった授業。自身が立ち上げたコーヒーブランド「hana+hi と coffee」のストーリーに多くの学生が関心を持ったことからプロジェクトが発足し、学部生と大学院生20人が集結した。リーダーを務めた農学研究科修士課程2年生の山田彩映さんは食とその開発に興味があり「健康や栄養の観点から農をとらえ、食べ物の生産から開発、流通に至るまでを学べることに魅力を感じました」と農学部食品栄養学科に入学した。

プロジェクトはコーヒーの企画からスタート。企画を進める中で「実はコーヒーが苦手」という声メンバーから上がった。「苦手な理由を探れば誰もが楽しめるコーヒーができ

るはず」と視点を変え、コーヒーが苦手な人用と好きな人用という2種類の開発に挑戦。メンバーがリサーチしたコーヒーの嗜好や花陽氏のアドバイスを元にROOTは酸味や苦味が少なくフルーティーで甘味のある2種のコーヒーをブレンド。LEAFはやさしい酸味とコクがある3種のコーヒーをバランス良く合わせた。このベストな配合に至るまでには配合の割合を細かく変えて試飲を繰り返し、自分たちの商品を作り上げたい思いと、味覚の官能評価をはじめ農学部での学修や実習によって培われた知識が大きな力となった。

開発開始から約8カ月後、ついにコーヒーが完成。購入者からは「飲みやすい」「コーヒーがより好きになった」と好評を得ている。

プロジェクトを通じてコーヒーへの関心が一段と高まった山田さん。「食品の香りの精神作用を研究しているのでコーヒーの香りすることも調べたいです。また食品のアップサイクルの観点から抽出後のコーヒーの活用も考えています」。卒業後に携わる商品開発にもこの経験を活かしたいという。

2つの袋を縦に並べると1本の木に見えるパッケージデザインもメンバーによるもの。今回のプロジェクトが農学部にも根づき、葉が生い茂る大木へと育っていかずだ。

03

People, Unlimited

経営学部経営学科4年生
滋賀県立守山高等学校出身
林 泰誠 さん

ゴールは悟り。 煩惱に楽しく向き合うカードゲーム

欲望や怒りなどの煩惱を捨て悟りを開く。この厳しい道のりを他者とともに歩み、仏教について体感的に学べるカードゲーム「にゃむ阿弥陀仏VS悟りーチ」を経営学部4年生の林泰誠さんが開発した。「私は龍谷大学の留学生の生活を支えるレジデント・サポーターを務めていました。活動を通じて、ボードゲームが人と人の距離を縮める力を持つことに魅了されました。スマホを触りがちな学生が対面で語り合い、絆が深まるのではと着想し、TREP[※]の龍谷チャレンジにカードゲームの企画を応募したところ採択されました」

「にゃむ阿弥陀仏VS悟りーチ」は、煩惱カード、浄土真宗カード、他力の信心カードの計108枚で構成され、2～5人で楽しむ。プレイヤーは「修行僧」として7枚のカードが配られ、ルールに従って手札を捨てたり山から引いたりして、最終的に0枚になれば勝利。「煩惱がなくなり悟りの境地に達したということです」と林さん。煩惱Maxカードの質問には全員で答え、お互いの煩惱をみつめる時間が生まれる。「悪人正機」「煩惱具足の凡夫」といった仏教の教えが記された浄土真宗カードは効果が発動するため、駆け引きが深まる。煩惱を捨てきれない状況でも、阿弥陀様に救われて逆転勝利する展開もある。林さんの創意工夫

によって自ずと対話が生まれ、ゲームとしての面白さを味わえることも魅力だ。それだけにルール作りからカードのデザインまで、約5カ月の取り組みはまさに修行だったと林さんは振り返る。「ここまでの大学生活では、思い通りにいかないことも多く、煩惱に苛まれていました。そんな時に浄土真宗の教えに触れて心が安らいだ経験があります。このゲームを通じて、浄土真宗を楽しく学んでもらえたら嬉しいです」

カード完成後は「龍谷祭」をはじめ、定期的な体験会を開催。『目標とか努力とか...もう疲れた』『ダイエットは明日から』『ポイント溜まるし買っちゃおう』など、林さんが絞り出した等身大の煩惱は「ゲーム以上に会話が盛り上がった」「自分の悩みにも友人の悩みにも気づいた」と参加者の共感を獲得。今後はカード枚数の調整などゲームの質を高めるとともに、龍谷大学だけでなく、付属平安高等学校をはじめとする仏教系学校の教材や寺院での活用をめざすクラウドファンディングを予定。「TREPの支援や宗教学が専門の先生の監修、浄土真宗の精神を伝える学生団体・伝道部の協力など、制作を通じて結ばれたご縁も大切にカードゲームを広めていきます」と抱負を語る林さんの“修行”は続いていく。



「にゃん阿弥陀仏 VS 悟りー子」ルール説明動画
https://www.youtube.com/watch?v=F_-qTX0QHS8

04 Education, Unlimited

政策学部
深尾 昌峰 教授



「仏教SDGs概論」最終講義で総評を述べる深尾教授



仏教SDGsの第一歩。 社会課題に気づく眼差しを育む

本学固有の知見と哲学を「講義」に

創立400年となる2039年に向けた「龍谷大学基本構想400」のもと「仏教SDGs」を掲げ、社会課題解決に取り組む龍谷大学。ソーシャルビジネスの拠点「ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンター」でも様々な研究と実践を積み重ねていることから、2025年度より同センターが提供する教養教育科目「仏教SDGs概論」が開講された。「様々な先生方が専門性を基に社会に向き合っている本学ならではの知見を活かすべく、講義として構成しました。社会を変えていくためには、学問領域を超えた多様な専門性が重要です。本学で社会課題解決に取り組み始めようとする1年生に、それを伝えていくことが目的です」と語る政策学部の深尾昌峰教授。この科目を設計、コーディネートしている。

科目は本学の社会課題解決の取り組みを紹介するオウンドメディア「ReTACTION」の3つの視点であるRe HUMAN・Re NATURE・Re REGIONALを軸に全15回で構成。各視点に関連した専門分野を持つ教員によるチェーンレクチャー形式で講義がおこなわれる。2025年度は眞鍋邦大准教授（経営学部）の「地域とビジネス、農業」、奥田哲士教授（先端理工

学部）の「廃棄物から考える防災と被災地の復旧・復興」、玉井鉄宗准教授（農学部）の「持続可能な農業」、石原凌河准教授（政策学部）の「地域レジリエンスと防災、被災地からの学び」、中根真教授（短期大学部）の「子育て家庭の社会的孤立」、阿部大輔教授（政策学部）の「オーバーツーリズムと住民」をテーマに6名の教員が担当。学生はそれぞれの知見を学び、最終課題として「ReTACTION」の原稿を学生自身が執筆する点がこの科目の特徴だ。「講義では社会課題を捉える“眼差し”を養い、その上で社会や普段の生活を見渡すと、今まで見過ごしていたことや、何となく疑問や不安に感じていたことに気づきます。記事執筆で求められる自分なりの問いと見解の言語化は、実は社会課題解決を含む仏教SDGsの第一歩。というのは、社会課題は一人では解決できず、共感や仲間を得るために伝える力が欠かせないからです」と説明する深尾教授。毎回の講義後に提出されるレポートは、当初講義の感想が多かったが、京都で大学生活を過ごす上でオーバーツーリズムが死活問題であることや、日本で自給率が高い食料品も肥料や飼料は輸入に依存していることに危機感を抱いたり、徐々に学生の眼差しが変わり始めたという。



選出された記事を発表する学生

学生らしい視点で社会課題の見解を執筆

この授業で学生から提出された原稿は、内容やテーマ性を踏まえ、外部講師として招聘したライターの指導のもとブラッシュアップをおこない、一部を「ReTAcTION」に掲載する予定だ。第14回の講義を終えて、学生たちは執筆に着手、第15回の最終講義で7名の学生から記事の発表がおこなわれた。「教員と講義内容はもちろん、受講する学生の所属学部も多岐にわたり、様々な内容の記事が提出されました」と深尾教授と担当教員は手応えを感じる。「例えば、本学の行動哲学『自省利他』や仏教SDGsの学びから、これまでスマホのメッセージアプリでの既読スルーへ不

安を感じていたのを、忙しいのだろうと思いやる気持ちが芽生えたという記事があり、学生ならではの視点だと感じました」。また、同じ授業を受けた学生が、同じテーマについて異なる立場から原稿を執筆していることも重要だと深尾教授は述べる。「農薬使用によってミツバチなどの有益昆虫まで駆除が生じており対策が必要とする学生と、農業就労者の高齢化や人手不足によって害虫や雑草の駆除が負担となっており、農薬に頼らざるを得ないと書いた学生がいました。一つの方向から物事を捉え対策を講じても反論が上がるなどして、課題解決やソーシャルイノベーションには繋がりません。上下左右斜めと全方向から見て、問いを立て、考えることが必要



です。社会課題解決には現行の社会構造が高い壁として立ちはだかることもあります。その時必要となるのが広い視野と多様な知識、そして人の繋がりであり、その力こそがこの科目で獲得できると思います」と深尾教授は語る。

「ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンター」では同時に教養教育科目「アントレプレナーシップ入門」も開講。「仏教SDGs概論」を受講した今回の1年生はもちろん、次年度以降も潜在的な課題に気づく学生が育ち、それぞれの専門分野での学修や研究を通じて社会課題解決に貢献する、そして起業家やソーシャルイノベーターとして羽ばたいていくことも期待している。



深尾 昌峰

滋賀大学大学院教育学研究科修了。在学中に阪神・淡路大震災被災地ボランティア活動に従事。1998年に特定非営利活動法人きょうとNPOセンター、2001年NPO法人放送局・京都コミュニティ放送（京都三条ラジオカフェ）を設立。公益財団法人京都地域創造基金理事長などを歴任し、2010年龍谷大学着任。2022年より龍谷大学副学長。

04 Education, Unlimited

法学部
寺川 史朗 教授

文学研究科 東洋史学専攻 修士課程 1年生
大西 春叶 さん



授業観察に向けての担当教員と学生による事前面談の様子



学生と教員が協働する授業づくり ともに学び、ともに磨く

学生目線で授業をチェックして提案

現在、日本の大学では教員が授業内容や方法を改善・向上させるための組織的な取り組み「FD^{*}活動」が義務化されている。龍谷大学では2019年度に策定した「龍谷大学基本構想400」の重点戦略の一つとして「学修者中心」の学びを掲げ、学生主体の学びの仕組み構築に注力。その一環として、2021年度に学修支援・教育開発センターの指定研究プロジェクトとして、法学部の寺川史朗教授を研究代表者とする「学生による授業観察」を開始。この研究成果をもとに、2023年度より学修支援・教育開発センターの新規事業として学生が第三者の立場で授業を観察し、担当教員に特筆点や改善点を含むフィードバックをおこなう「授業観察」プログラムがスタートした。「これまで大学の授業は教員に委ねられてきました。学問の自由、教授の自由は重要な理念ですが、教員の意図だけで授業がおこなわれると、学生の受け止め方や内容の理解との間に大きなズレが生じてしまうことがあります。学生は様々な授業を受けているので、教員以上に授業を見る目に長けていることから率直な意見と忖度のない判断のために、この授業観察プログラムを開設しました」

授業観察は寺川教授と学修支援・教育開発センターが窓口となり、授業を観察してほしい教員と観察したい学生を募集。観察をおこなうことが決まった学生は授業観察の意義や方法などについての研修を受けた後に、授業の担当教員と事前面談。教員側はどんな点を観察してほしいか、学生側は教員が授業で大切にしていることは何かなどを綿密に話し合い、授業観察の目的を共有していく。

「2023年度からの本格実施にあたって、まず私の授業観察を実施しました」と寺川教授。担当した文学研究科の大西春叶さんは「私は大学教員になるのが夢なので、大学における授業の運営に関わってみたいと思い応募しました」と動機を語る。授業観察した科目は「日本国憲法」。全学共通の教養教育科目のため法学部以外の学生でも理解できるかに観察の重点が置かれた。「授業は大変面白く、文学部の私でも理解が深まりました。その中で授業内容の視覚的な理解と臨場感を高めるために提示されたWebマップが見にくく、寺川先生の意図が伝わりきっていないのではと感じました」と大西さん。授業の魅力・課題・提案という項目に沿った報告書を受け取った寺川教授は提示方法を見直し、受講生に意図が伝わるようになったという。



授業観察の様子

授業や教員への意識、学ぶ姿勢に効果

授業観察は授業や教員だけでなく、担当した学生にも大きな影響をもたらしている。「私は寺川先生の授業を含め3度の授業観察を担当しましたが、どの先生方も授業の準備をはじめ、学生のために努力と工夫を積み重ねられていることがよくわかりました。授業を理解するためには、学生側も予習・復習など万全に準備し、授業に臨む姿勢を整えることが必要だと痛感し、先生への接し方、授業や学びへの取り組み方が変わったと思います」と大西さん。また全学部1年次の必修科目である「仏教の思想」の授業を観察した学生からは「改めて受講すると、授業という枠組みを

超えた深い学びが人生の指針になった」との感想も聞かれた。「こういった学生の意識や行動の変化は私たちの想定を超えた効果です」と寺川教授は手応えを語る。

2023年度のスタート以降、実施件数を少しずつ増やし、2025年度には10件実施された。「学生が教員を批判したり、教員に改善義務を課したりするものでは決してありません。学生と教員が互いの立場を尊重し、より良い授業をともに築いていくための前向きな取り組みです」と改めて強調する寺川教授。大西さんは「確かに授業観察をおこなってみて、授業は一方的に先生から与えられるものではなく、先生と学生が一緒に作り上げて、発展させていくものだ実感しました」と続ける。



寺川 史朗

中央大学大学院法学研究科修士課程修了。専門は憲法学、公法学。主な研究テーマとして 教育権や公教育のあり方、「存在の肯定」による憲法解釈。日本公法学会、日本教育法学会などに所属。2012年龍谷大学法学部に着任。2021・2022年度学修支援・教育開発センター指定研究プロジェクト研究代表者として、授業観察を開始。現在は、学修支援・教育開発専門員 小林珠子氏の協力のもと、一層の推進を図っている。

報告書の中には「学生と教員の距離が近く、良い雰囲気で授業が進行していた」「グループワークの際、学生も先生も積極的に意見を出し合い、活気に溢れていた」との声も多くあり、本学では学生と教員がともに作り上げる授業がすでに実践されていることが表れている。だからこそ、寺川教授はこの授業観察の意義や効果を全学的に広め、授業と教育のさらなる質向上、学生と教員の良好な関係構築の強化に力を尽くしていきたいという。

「授業観察を受けた教員同士の情報共有や、授業観察を担当した学生による募集活動、観察する際のポイントのレクチャー、この経験による効果の報告会の開催など、様々なことを試していければと考えています」



大西 春叶

文学研究科 東洋史学専攻 修士課程1年生。三重県立松阪高等学校出身。中国史・中央アジア史に興味があり、大学院では唐の軍事と外交について研究。授業観察プログラムの他に、レポートや卒業論文など書くことにまつわる相談全般に対応する「ライティングサポートセンター」のライティングチューターを務めている。

探し求めていた自然共生と実証実験の拠点として 古民家と田畑を再生

衣食の自給自足と地域移住を体験可能

染織作家として活動していた経験から食の地産地消を軸としたスロー・フードになぞらえた、衣を種から育てて作る「スロー・クローズ」を提唱する政策学部の大石尚子教授。持続可能な農業や地域再生の実践的な研究に取り組む中で、理想郷のような拠点を手に入れた。京都府綾部市の古民家と田畑である。大石教授はここを「あやべりビングラボ」と命名した。

食と農を通じたソーシャル・イノベーションには自然と人間の結び直し、とくに若い世代の関わりが必要として、大石ゼミの学生は有機農業者をはじめ地域と連携したフィールドワークに取り組む。その一つが京都府亀岡市での有機野菜や有機米の栽培。放置竹林の竹を炭にし、土づくりに使ってCO₂削減の取り組みもおこなった。もう一つは京都市の北部・大原での有機野菜の栽培。染織作家時代の拠点だったことから綿花や藍を育てて衣を作ることも進めている。これらの取り組みの一方、より主体的に活動できる場を長年探していた大石教授。約2年前、ゼミの卒業生の繋がりがからこの古民家との運命の出合いを果たした。

「あやべりビングラボ」での活動は大石ゼミの全学生が参加。母屋と離れ、作業場、蔵のリノベーションからスタートし、広大な田畑と裏山の整備に汗を流した。「地元の手打ち蕎麦屋の店主の勧めもあり、短期で収穫できるそばの栽培に挑戦しました。作業場に、籾を選別する『唐箕(とうみ)』という木製機具が残されていたので、蕎麦の選別に活用することができました」と大石教授。畑では亀岡・大原での経験を活かした野菜などの有機栽培も開始。土づくりには裏山で伐採した竹を活用した竹チップや竹炭、落ち葉などを活用。「綿花と藍は、酷暑と鹿の食害で思ったような収穫に至りませんでした」と深刻化する環境課題の現実と直面したが、次に繋がる実証データと経験を積む貴重な機会になったという。次年度以降は蕎麦や野菜、綿花、藍に加え、果物やナッツなどの有機栽培にも挑む。「持続可能な農業や地域再生の実現には、生産者の収益確保や地域への経済的循環の仕組みの構築も重要です。そのために亀岡・大原のプロジェクトでは野菜などの販売をおこなっています。綾部でも農作物の販売と、将来的には母屋にカフェを作るなどして収益化に繋がりたいので、様々な農作物を安定して自給自足できるよう、有機農業に取り組んでいきます」



綿花から糸を紡ぎ出す大石教授



屋外コンサート・イベントの開催に向けて裏山を造成中

全学的なラボへの進化もめざしていく

京都府綾部市は少子高齢化や中山間地域の人口流出・減少の課題解決を図るために移住促進をいち早く実施。官民が連携した空き家斡旋など、先駆的な施策によって移住者が増加し、新たなコミュニティやネットワークが形成されている。「移住者や農業をはじめ地域産業に関わる若い担い手は、持続可能な取り組みや衣食住のソーシャル・イノベーションの軸になります」と大石教授。一方で地域の課題は一朝一夕に解決することが難しく、農業などの家業の承継や住まいの相続だけでなく、祭りをはじめ地域に受け継がれてきた伝統行事の開催にも苦慮する地区も少な

くないという。「こういった状況に鑑みると、農産物の販売などを通じて綾部の魅力を外に向けて発信してだけでなく、地域の内側にも関わり貢献していく、綾部のハブのような存在になっていくことも私たちの重要な役割です。例えば、お祭りの櫓（やぐら）の設営や露店の運営などは、学生が持つ活力や行動力を活かせる場面でもあるので、きっと力になれると思います」と大石教授はラボと学生の意義を語る。現在、ラボでは地域住民との交流やラボへの理解を深めていく機会として、裏山での屋外コンサート・イベントの準備が進行中。また、大石教授が愛用する手動の糸紡ぎ機と織機を使っの布作りや藍染めのワークショップも開催する。



さらに大石教授はラボの全学的な活用も構想している。「地域の課題解決には様々な分野の知見が欠かせません。そのため、他学部と連携した実証実験も考えています。また私のゼミには、海外青年協力隊での農業支援の経験から『有機農業に携わりたい』と考える卒業生や、学生時代にフィールドワークとコーヒーに関する研究に打ち込んだことをきっかけに『地域の課題解決も図れるカフェを経営したい』と志す卒業生がいます。こうした卒業後の夢を実現する場としても、起業やソーシャル・イノベーションに繋がる場としても発展していくことが理想です」。運命の出会いが研究と学生、地域、そして本学にも好循環をもたらしていく。



大石 尚子

大阪外国語大学イタリア語学科卒業。同志社大学大学院ソーシャル・イノベーション研究コース博士後期課程修了。専門はソーシャル・イノベーション、農村地域開発、食農政策。染織作家活動と並行してイタリアに渡りアパレル商社勤務。帰国後、同志社大学院総合政策科学研究科に進み、2011年同博士課程修了。2010年より龍谷大学 地域公共人材・政策開発リサーチセンター(LORC)にて活動。2015年龍谷大学政策学部に着任。



05 Research, Unlimited

先端理工学部知能情報メディア課程
曾我 麻佐子 准教授

VRで無限の創作、新たな表現を実現 芸術と技術が融合した「ダンス&テクノロジー」

仮想空間がダンスの創作空間に

身体表現によって人々を魅了するダンス。中でも現代舞踊と呼ばれるコンテンポラリーダンスは常に新しい動きや表現が求められるため、振付家やダンサーは身体と想像力を駆使して創作に情熱を注いでいる。知能情報メディア課程の曾我麻佐子准教授は、人や物体の動きをセンサーやカメラで捉え、三次元データ化するモーションキャプチャが世の中に普及し始めた頃からダンスの創作活動と最新技術を融合させた「ダンス&テクノロジー」という独自の研究に取り組んでいる。その成果の一つがモーションキャプチャで取得したダンサーのアバターをアプリ上で操作するダンスの学習・創作支援システムである。ステップやジャンプなどの短い動きに腕や頭の動きを組み合わせて振付を検討する仕組みで、使用した振付家やダンサーからは「新しい動きの発掘に繋がる」と好評。実際の舞台公演の振付にも活用されている。

近年、曾我准教授はコンピュータによって作り出された仮想空間をHMD（ヘッドマウントディスプレイ）などのデバイスを装着して疑似体験するVRに注目。これを使った新たなシステムの開発を進めている。

研究室ではHMDを装着した学生が仮想空間の中で自分の分身となるアバターを両手のコントローラーで操作していた。腕を上げたり、体の向きを変えたりすると、その動きがリアルタイムでアバターへ反映される。

「アバターは自分の可動域を超えた動きも、生身の人間では不可能な動きも可能とします。外見や身体構造を変更したり、アーカイブから動きを選択して部分的に結合したりと自在に扱えます。例えば、手は脚に比べると細やかに動くので、手の動きで脚を操作すれば今までになかった動きの表現に繋がると思います」とVRシステムの機能や効果を語る曾我准教授。さらにVRの中のアバターを自分の分身ではなく、自分とは異なる振付家やダンサーとして捉えることで動きの客観的な分析にも活用。視点も360度見渡せるだけでなく、上から俯瞰したり下から覗き込んだりできるので、現実では見ることでできない角度から動きをチェックできる。またダンサーのアバターを複数配置して動かすこともできるので、モニターに映し出された仮想空間はまさにダンスの稽古場。こうした仮想空間と疑似体験を共有することで、振付家が動きを伝えるコミュニケーションツールとしての可能性も検証しているという。



ダンスの学習・創作支援システムのアプリを検証する曾我准教授と学生たち

アバターに限界なし。ダンスの継続も支援

学生時代から学業とダンスを両立し、今でもクラシックバレエを続けているという曾我准教授。美しい動きを身につけて舞台上で表現するためのレッスンに打ち込む中で、この動きはどのように生み出されているのか、関節や筋肉などの身体の構造や動作の特性を人間工学の視点から分析することに関心を持ち、研究者の道を志したという。しかし、現在取り組む「ダンス&テクノロジー」の研究とシステム開発では、自身もダンサーだったからこそ理解している表現者としての思いを何よりも大切にしている。その証がシステムの目的に共通する「支援」という言葉である。

「自らの身体表現や創造活動をアバターやAIに託したいと考えるダンサーや振付家はいないといっても過言ではないでしょう。プロはむしろアバターやAIを超えることをめざすと思うので、その時の手助けをしたいと考えています」と語る曾我准教授。VRの活用も、システムの進化や創作の幅を広げるだけでなく、振付家やダンサーへの配慮も踏まえてのこと。創作の過程では新しい動きを何度も試すことから振付家やダンサーの身体に掛かる負荷は大きく、時にはケガに繋がる恐れもある。その点、アバターは疲れたり、ケガをしたりすることはない。コントローラーの操作だけで動きや回数、時間を問わず、無制限の試行錯誤がかなうのだ。



研究活動の一環として渡米した際、病気の影響で以前のように踊れなくなったダンサーにVRシステムを体験してもらったところ「really helpful」と喜ばれた。「体力や年齢などの限界を超えて創作活動を可能とする、そしてダンスを楽しむことも続けられる、このシステムはそんな支援にも役立つと実感しました」と曾我准教授。目標はいつでもどこでも簡単に活用できるダンスの学習・創作支援システム。「最近、続々と登場するゴーグルやサングラスのような手軽なVRデバイスの活用も考えています。2027年4月に開設予定[※]の情報学部(仮称)によって環境や設備がさらに充実するので研究に一層注力し、1日も早い社会実装を実現したいと思います」



曾我 麻佐子

名古屋大学大学院人間情報学研究所修了。博士(学術)。専門はCGアニメーションと身体動作情報処理。2004年龍谷大学に着任。2007年度EPFL(ローザンヌ工科大学)VR Lab客員研究員、2024年度UCSB(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)HAX Lab客員研究員。龍谷大学古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター(DARC)副センター長を務め、龍谷ミュージアムにおいて「バーチャル聖護院」「3D仮想試着」「AR舍利容器」などの展観技法も披露。

初公開の名宝も多数 真如堂の知られざる魅力に迫る

春季特別展

平安の京にみちる阿弥陀仏
「京都・真如堂の名宝」

2026年4月18日(土)～6月14日(日)

休館日：月曜日(ただし、5月4日は開館)、5月7日(木)
主催：龍谷ミュージアム、朝日新聞社、京都新聞

京都市の洛東に伽藍を構える真正極楽寺、通称・真如堂は、平安時代に戒算上人が開いた天台宗の古刹である。「本尊は慈覚大師円仁が造立したという阿弥陀如来です。比叡山から移安される際、京の人々、とくに女人救済を願ったところ、三度うなずき、都へお越しになられたことから『うなずきの弥陀』と呼ばれ、阿弥陀如来の立像としては日本最古とされています」と語る龍谷ミュージアム石川知彦副館長。応仁の乱で伽藍が焼失し、場所を転々としながらも真如堂は都の念仏信仰の中心として栄え、室町時代に創始された念仏法要「お十夜」は現在も真如堂の重要な行事となっている。1693年には建立当初に近い現在地に再興。近世以降は京都の豪商・三井家の菩提寺として造営と興隆が支えられてきた。本展では、真如堂に伝わる仏像や仏画、経典、近世絵画など、国宝1件、国指定重要文化財10件を含む約100件を贅沢に公開。見どころの一つは、龍谷ミュージアム所蔵の「真如堂阿弥陀如来像」(室町時代)だ。「応仁の乱で都が炎上する中、本尊は救い出されたものの、

光背や蓮華座は欠損しました。しかし、この仏画には造立当初のままの光背や蓮華座が描かれています。こうした資料価値の高い貴重な作品を当館で所蔵していたことも、本展開催のご縁に繋がったのではないかと思います」。初公開となる真如堂一山の喜運院、そして法輪院の「木造阿弥陀如来立像」をはじめ、真如堂から惜しみなく名宝が出展されることも縁の賜物だろう。阿弥陀如来が立ち上がったことは仏教史の上でも画期的なことで、以後数々の阿弥陀如来立像が制作される契機となった。このことから真如堂草創期以降の都の仏像にも着目。「伏見区恵福寺像をはじめ、これだけの木彫像が一堂に並ぶことはめずらしいことです」。真如堂に伝わる中近世の古文書の一部を紹介する京都市歴史資料館の「真如堂の古文書」展とあわせて、長い歴史と京都の人々との深い結びつきを持つ真如堂の魅力を、名宝を通じて存分に堪能できる機会となる。



石川知彦 龍谷ミュージアム副館長



龍谷ミュージアム
Webサイト



「木造 阿弥陀如来立像」鎌倉時代 真如堂一山 法輪院 画像提供：美術院



気候変動を自分事に。学生主体の気候会議が ゼロカーボンユニバーシティを推進

日本の大学では珍しい先進的な取り組みとして2021年に始まった「龍谷大学学生気候会議」。2022年に「龍谷大学カーボンニュートラル宣言」を発出し、創立400周年を迎える2039年に「ゼロカーボンユニバーシティ」の達成をめざす龍谷大学において、学生が大学の気候ガバナンスに参画する点に学外からの注目も集めてきた。2025年、第5回開催を迎えた「学生気候会議」について、学生運営団体OCsに所属する宮木さんと、5年前に会議開催の道筋を築いた的場教授が語り合った。

的場: 気候会議は気候変動に対する政策や事業開発などについて、市民の意思を反映させるため、ヨーロッパを中心に国や自治体のレベルで実施されてきました。日本でも国内初とされる「気候市民会議さっぽろ」を皮切りに、気候会議が広がり始めたことから、私と村田和代教授(政策学部)、斎藤文彦教授(国際学部)が「大学で開催すれば、学生をはじめ未来を担う若い世代が気候変動などの環境課題を考えるきっかけになるのでは」と地域公共人材・政策開発リサーチセンター(以降LORC)の協力のもと「第1回学生気候会議」を開催しました。すると参加した学生が強い関心を示し、学生団体「OCs (Opportunities and Choices for Students: オックス)」を自主的に設立してくれたのです。以降は学生とともに作り上げる会議になりました。

宮木: 私は社会の様々な問題に興味があったことから1年生の時に「学生気候会議」に参加したところ、とても有意義な話し合いがおこなわれていたことに驚き、自分もこの会議に貢献したいと思って、OCsに入りました。

的場: 「学生気候会議」は深草キャンパスと瀬田キャンパスで各1日、2日間にわたっておこなわれます。開催にあたっては学生運営団体であるOCsと、実行委員会である私たち教員、LORC、2024年の第4回からはサステナビリティ推進室も加わって、その年のテーマや当日のプログラム、講演に登壇する教員や外部からのゲストの調整といった準備を進めます。

宮木: 深草キャンパスの灯炬館に設置された「る」の森をはじめ、両キャンパスの環境に配慮された箇所を巡るツアーは参加者に好評を得ました。プログラムの中でOCsは、自分たちの日々の行動が地球環境にどのような影響を与えているのか、楽しみながらシミュレーションしていくカードゲームとグループワークのファシリテーターを務めるので、教員の方や外部講師を招いての「ファシリテーション研修」を毎年受講するなど事前学習が欠かせません。個々の意見を引き出すのはなかなか難しいですが、以前に比べると話す・聞く力とディスカッションを活発化させる力が身についたと思います。



宮木 朝寛 文学部東洋史学専攻3年生。鈴鹿中等教育学校出身。1年生の時に参加した「学生気候会議」での学生たちの活発な議論に触発されて「OCs(オックス)」に所属。学外で開催される気候や環境課題解決、サステナビリティ関連のイベントにも参加。学部では近藤真美准教授のゼミに所属し、卒業論文では東南アジアのアンコール朝について取り上げる予定。

的場 信敬 英国バーミンガム大学Centre for Urban and Regional Studies (CURS) Ph.D.課程修了。専門は地域ガバナンス論、持続可能性論。NPO法人で活躍後、2004年に龍谷大学地域人材・公共政策開発システム・オープン・リサーチ・センターの博士研究員に着任。2011年、政策学部准教授、2018年、政策学部教授。2025年より政策学研究科長に就任。



的場:「学生気候会議」でのグループワークでは本学の環境への取り組みに関連するテーマについてディスカッションをおこなってもらいます。第5回では「建物・交通・エネルギー・食・ライフスタイル」をテーマに、参加者が話し合いましたが、毎回、学生らしい意見がたくさん挙がりますね。

宮木:例えば「龍谷の森」を自然とふれあい、リラックスできる場として活用しよう、整備のために伐採した木材を利用したワークショップを開催しようといった意見は、学生の私もおもしろい視点だと感じます。

的場:学生の視点や感覚を基にした意見は、本学が「ゼロカーボンユニバーシティ」をはじめとする目標を実現していく上で重要です。

宮木:学生生活という点で、瀬田キャンパスと

最寄り駅の瀬田駅の移動のために設置された「シェアサイクル」について、利用時間やコース別に料金を設定してより手軽に使えるようにすれば稼働率が上がり、脱炭素をはじめ環境課題解決に無理なく貢献していけるのでは、とのアイデアも挙がりました。

的場:「学生気候会議」は、欧米や日本の気候会議の方法と同じく、学部・大学院の学生に無作為でメールを送って参加者を募りますが、必ずしも幅広い参加には結びついていません。学術的かつ専門的に議論するのはと敬遠されているのかもしれませんが、決してそうではないので、気軽に参加してほしいですね。

宮木:実は私も気候変動の話は遠い世界のこのように感じていたのですが、OCsの活動を通じて、近年の猛暑やゲリラ豪雨は、農作物の収穫量や物価高、日常生活にも影響



「学生気候会議」のグループワークの様子

していることから、気候変動を自分事として考えるようになりました。また会議終了後には参加者の声やOCsの分析を『提言書』にまとめて学長に提出するので、大学の意思決定に参画していることも実感できます。

的場:この会議を機に、環境先進国のスウェーデンの大学に留学し、現在は環境課題解決をめざすNPO法人で活躍するなど、将来の進路が広がったOCsのメンバーもいますね。

宮木:確かに他学部や学外の方とも交流できるので、視野が広がります。また私は東南アジア史を専攻しているのですが、史料が少ないのです。それゆえ文献史料以外の根拠も必要になってきます。火山噴火や地震など「歴史と気候の関係」からリサーチができることを知れたのもよかったです。

的場:今後の「学生気候会議」では、深草キャンパスではカーボンニュートラル、瀬田キャンパスでは「龍谷の森」を軸にネイチャーポジティブを考えるなど、キャンパスごとにテーマを分けることで、議論の広がりや内容のさらなる深化を図ります。

宮木:私は深草と瀬田の近隣住民の方にも参加してもらうことを考えています。さらに将来的には京都の他大学、全国の大学と連携しての学生気候会議開催もめざしていきたいです。

的場:本学の目標達成はもちろん、未来を担う世代が集い、考え、気候をはじめ社会課題解決のアクションを起こしていく、そんなスケールの大きな会議へと発展していくことも願っています。



08 My Campus マイキャンパス

タイトル「千古不易の智恵の学び舎」

Oさん 2025年9月撮影(大宮キャンパス)

「My Campus」ページでは、時代の流れとともに変わりゆく龍谷大学の「今」を感じていただけるキャンパス風景写真を、読者の皆さまから募り紹介しています。キャンパスの素敵な瞬間を是非写真に収めてご応募ください。

応募写真の中から厳選の上、次号の本ページを飾らせていただきます。

応募締切

2026年6月30日(火)

募集内容

龍谷大学のキャンパスを撮影した写真
(本学と関連のある場所・施設等)

応募方法

以下のフォームからご応募ください。
<https://www.ryukoku.ac.jp/about/mycampus/>



注意事項

- ・2026年3月以降に本人が撮影した写真に限ります。
- ・1点につき10MB以内のjpgファイル。
- ・誌面の都合上、掲載は横サイズのトリミングとなります。撮影の際にはご注意ください。
- ・組写真、合成写真、過度の画像補正など実像に反する写真は不可。
- ・著作権・肖像権の侵害には十分に注意してください。
- ・応募に係る個人情報は本事業以外には利用しません。
- ・応募写真については、本学の広報活動(大学公式グッズ等を含む)に使用させていただく場合があります。応募をもって、これらの使用に同意いただいたものとします。

応募写真は以下から閲覧していただけます。

龍谷大学の「今」を是非ご覧ください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/mycampus/>



最新情報



「2025年世界ジュニア柔道選手権大会」で柔道部森近颯選手が63kg級世界チャンピオンに

2025年10月にペルー・リマで開催された「2025年世界ジュニア柔道選手権大会」女子63kg級において日本代表として出場した柔道部の森近颯選手(経営学部2年)が金メダルを獲得。前年度の銅メダル獲得に引き続き、2度目の出場となる今大会で見事世界一に輝いた。「全日本学生柔道体重別選手権大会」で優勝して間もない厳しいコンディションのなか、世界の強豪を相手に連戦を勝ち抜いた。



「全日本学生バドミントン大学対抗戦」創部初となる女子団体戦2連覇を達成

2025年11月に石川県でおこなわれた「全日本学生バドミントン大学対抗戦」女子団体戦でバドミントン部女子が創部初となる2連覇の快挙を達成。決勝では、過去に4度敗れてきた筑波大学を相手にダブルスの中出すみれ選手(法学部4年)・田邊裕美選手(国際学部4年)ペアやシングルスの方廣真季選手(経済学部3年)が活躍。白熱した試合を勝利へ導いた。先輩から後輩へバトンを繋ぎ、3連覇に向けて新たな戦いが始まる。



「第56回秋季関西学生ソフトボールリーグ戦」ソフトボール部女子が20年ぶりに秋季リーグ優勝

2025年9月から10月にかけて開催された「第56回秋季関西学生ソフトボールリーグ戦」でソフトボール部女子が20年ぶりに1部リーグ優勝を果たした。通算成績は4勝1敗。春季リーグ戦3位の結果を踏まえて上位進出をめざした今大会で、見事20年ぶりの快挙を達成。今後は2026年度春季リーグ戦での全勝優勝、西日本大会・全日本大会での勝利を目標にチーム一丸となって挑戦していく。



「第73回全日本吹奏楽コンクール」 吹奏楽部が6大会連続・ 通算16回目の金賞を受賞

2025年10月25日に新潟県でおこなわれた「第73回全日本吹奏楽コンクール」大学の部に関西代表として吹奏楽部が出場。6大会連続・通算16回目の金賞を受賞した。約200名の部員から選抜された55名が若林義人音楽総監督の指揮のもと、課題曲Ⅱ「ステップ、スキップ、ノンストップ(順次進行によるカブリッチョ)」と自由曲ジョン・マッキー作曲「付喪神: Tsukumogami (Haunted Objects)」を演奏。審査員から最高評価を受けた。



「第53回バントワーリング全国大会」 バトン・チアSPIRITSが全国大会で金賞

2025年12月6日、幕張メッセで開催された「第53回バントワーリング全国大会」大学の部において、バトン・チアSPIRITSが金賞を受賞した。テーマは「Jasmine～夕日の向こうへ～」。バトンを一度も落とさない演技を目標に掲げ、10名全員が一丸となって練習に打ち込んだ。半年間、一人ひとりが目標や課題に向き合い続けた積み重ねが、今回の成果に繋がった。



第24回全国障害者スポーツ大会 陸上競技部伴遼典選手が 大会新記録で優勝

第24回全国障害者スポーツ大会「わたSHIGA輝く障スポ」に、陸上競技部の伴遼典選手(国際学部4年)が、滋賀県代表として男子1,500mに出場し、堂々の優勝を果たした。力強い走りや冷静なレース展開で、自らが持つ大会記録を0秒77上回る大会新記録での優勝となった。日々の努力を積み重ねてつかんだ栄冠は、多くの人に勇気と感動を届けた。



日本初のCO₂ゼロEVスクールバスを導入 再生エネルギー100%で 深草・大宮キャンパス間を運行

2025年10月1日より深草キャンパスと大宮キャンパスを結ぶスクールバスの一部をEVバスに切り替え、再生可能エネルギー100%による運行を開始した。大学自家用事業としては、日本初^{*}となる走行時のCO₂排出量ゼロを実現。大阪ガスオートサービス株式会社とリース契約を結び、環境省の補助金に採択された。災害時の電力供給源としての活用も想定。持続可能な大学運営を実施するとともに地域防災にも貢献していく。

※本学独自調べ



株式会社ロゴスコポーレーションと 自然共生社会の実現に向けて 包括的連携協定を締結

2025年12月8日、瀬田キャンパスにて株式会社ロゴスコポーレーションとの包括的連携協定締結式を実施した。自然共生社会の実現と次世代教育の推進を目的に、教育・研究、地域連携、防災など多角的な共創を展開する。アウトドアの知見を活かした「学びと交流の場」の整備も加速させる。締結式終了後は、学生がロゴス社の製品に触れ、連携事業への期待感を醸成。これを契機に「ネイチャーポジティブ宣言」の具現化に向けた歩みを進める。



農学部創設10周年・農学研究科創設7周年 記念事業を開催

2025年10月25日、瀬田キャンパスにて農学部創設10周年・農学研究科7周年記念事業が開催された。本学客員教授であり宇宙飛行士の土井隆雄先生と本学初代農学部長の末原達郎先生を迎え「食と農の未来を考える～宇宙・アフリカ・滋賀～」と題した記念講演会を実施。懇親会では、龍谷米など農学部ゆかりの商品を味わいながら卒業生・在学生・教職員らが人々や地域との繋がりを再確認した。今後も食と農の未来に貢献する人材育成に励んでいく。



「びわこ文化公園都市」エリアの 交通課題解消へ 電動キックボードのポートを設置

2026年1月8日、龍谷大学瀬田キャンパスに電動キックボードと専用ポートが設置された。これは、滋賀県が2025年度から進める「びわこ文化公園都市・交通活性化」の取り組みの一つで、地域の交通課題の改善やエリア活性化、学生のキャンパスライフ向上を目的としている。ポートは瀬田駅前、びわこ文化公園、滋賀ダイハツアリーナにも設置されている。



発酵醸造学×スポーツ栄養学× スポーツマネジメントの知見を活用 「滋賀県版アスリートデニッシュ」が誕生

龍谷大学発酵醸造食品機能性研究センターとスポーツサイエンスコースが1食あたり20gのタンパク質を含む「滋賀県版アスリートデニッシュ」を開発。2025年9月・10月に開催された「第79回国民スポーツ大会・第24回全国障害者スポーツ大会」で試食を提供した。運動後のタンパク質摂取推奨量を満たすため、リカバリーや筋肉合成のサポートが期待できる。滋賀県各地の食材を使用し地方創生と健康・スポーツ産業振興に貢献することをめざす。



藤岡ゼミが「アップルサイクルプロジェクト」にて新商品を開発 フードロス削減と地域経済の貢献をめざす

経営学部藤岡ゼミが(株)ピオスタイルおよび青森県弘前市のりんご生産者と連携し「日本茶に合う摘果りんごのプロランタン」を開発。栽培の過程で廃棄される摘果りんごを活用し、フードロス削減と生産者支援をめざす「アップルサイクルプロジェクト」の第一弾で、学生自ら協力農家や加工業者の

龍谷メルシー・オンラインショップ

<https://store.shopping.yahoo.co.jp/ryukokumerci-online/rm-b003.html>



学生企画の展覧会を開催 「十二月展 ちよっと一服、ええ遊び —江戸時代の京・大坂娯楽案内—」

2025年12月3日から12月6日までの4日間、龍谷ミュージアムで学生が企画・運営する展覧会「十二月展 ちよっと一服、ええ遊び—江戸時代の京・大坂娯楽案内—」が開催された。46回目となる今年には江戸時代の上方で生まれた豊かな町人文化を「芸能」・「文学」・「旅行と食」・「遊戯」の4構成で紹介。学芸員資格取得をめざす文学部生が博物館実習の一環として企画から史資料の調査、キャプションや図録の制作といった学芸員の実務を実践した。



鮎寿司をクッキーに 産学連携で滋賀の新名物を共同開発

龍谷大学発酵醸造食品機能性研究センターと鮎寿司メーカー「奥村佃煮」、農学部食品栄養学科の学生が協働で「フナズシクッキー」を開発。2025年9月・10月に開催された「第79回国民スポーツ大会・第24回全国障害者スポーツ大会」で試食を提供した。田邊公一教授(農学部)と柿崎博美博士研究員の指導のもと宿谷紗良さん(農学部4年)がレシピを考案。商品価値が低い雄のニゴロバナの活用方法を示し、低・未利用魚の価値向上に貢献した。



農学部生が滋賀県高島市産「オリーブ茶」を使ったメニューを考案 ウェスティン都ホテル京都で提供

2025年11月、農学部食品栄養学科の学生が滋賀県高島市産の「オリーブ茶」を使って考案したメニューがウェスティン都ホテル京都の「京都冬の恵み」buffetで提供された。食品栄養学科の学びを活かした試作品から3品が採用され「オリーブ茶風味の茶碗蒸し」「豚肉のオリーブ茶風味のロースト茸ソース」「オリーブ茶のパンナコッタ」が完成。一流シェフの指導のもとで試行錯誤を重ね、実践的な学びを得る貴重な機会となった。



「守・破・離KANSAI学生ビジネスアイデアコンテスト」 竹谷多賀子ゼミ生がグランプリに輝く

2025年8月、大阪・関西万博で開催された経済産業省近畿経済産業局主催「守・破・離KANSAI学生ビジネスアイデアコンテスト」で経営学部竹谷多賀子ゼミの3名によるチームがグランプリにあたる優秀賞を受賞した。京都府和束町の特産「和束茶」を練り込んだ緑茶パンを開発し、地産地消と食育推進を目的として学校給食や大学生協での導入を提案。地域の抱える課題を十分に分析し、地域活性化が期待できる点で高い評価を得た。



龍谷大学がSDGs AICHI EXPOに初出展 産学官民連携でめざす持続可能なまちづくり

龍谷大学は、2025年10月に愛知県国際展示場で開催された「SDGs AICHI EXPO～SDGs 子ども・ユースフェア～」に初出展した。ソフトバンク株式会社と共同出展し、本学・ソフトバンク・大津市の連携事業「スマートシティハッカソン」を紹介。同社の山本雄亮氏、林秀信氏と松木平淳太学長補佐による講演「学生×企業×自治体でつくるスマートシティのかたち」が好評を得た。今後も「龍谷大学SDGs宣言」の具現化を加速させていく。



障がい者アート展「Unknowing わからないままに響きあう」開催

2025年11月25日から2026年1月27日まで深草キャンパス慧光館にて龍谷大学ユナスソーシャルビジネスリサーチセンター主催(企画:松本拓客員研究員)による障がい者アート展「Unknowing わからないままに響きあう」を開催した。本展は、「わかる」ことを目的とせず、わからないままに誰かと、何かと、ともにいることの可能性を探る。多くの来場者に作品を通して、わからなさのなかに共鳴する体験を届け、多様性の本質について問いかけた。

学部長・研究科長の就任について

次期学部長等を選出しましたのでお知らせします。

今回新たに選出された学部長等は(新規)、
再任された学部長等は(継続)と表記しております。
(任期:2026.4.1～2028.3.31)

(※経済学部長・経済学研究科長 2026.4.1～2027.3.31)

経済学部長(継続)
兵庫 一也(ひょうご かずや)

法学部長(新規)
松尾 秀哉(まつお ひでや)

国際学部長(継続)
清水 耕介(しみず こうすけ)

経済学研究科長(継続)
大原 盛樹(おほはら もりき)

経営学研究科長(新規)
岩田 浩(いわた ひろし)

法学研究科長(新規)
今川 嘉文(いまがわ よしふみ)

国際学研究科長(新規)
瀧口 順也(たきぐち じゅんや)

10 Book Café

新刊紹介

*は大学から出版助成を受けた書籍です。
著者編者等は本学関係者のみ、お名前を掲載しております。



新時代の刑事拘禁法・処遇法

石塚伸一先生・赤池一将先生古稀祝賀論文集

相澤 育郎 (法学部准教授) 共編
現代人文社 / 16,500円 (税込)



Robotinoで挑む! ロボカップ・ロジスティクスリーグ入門

ロボカップ公式ガイド

植村 涉 (先端理工学部准教授) 著
共立出版 / 3,740円 (税込)



消費者法入門

—消費者と企業の視点から—

カライスコス アントニオス (法学部教授) 共著
有斐閣 / 2,310円 (税込)



基礎ゼミ 社会学(第2版)

工藤 保則 (社会学部教授) 共編
世界思想社 / 2,310円 (税込)



チェンジ アクション 生活保護

生活保護裁判30年の軌跡

嶋田 佳広 (法学部教授) 共編著
明石書店 / 3,300円 (税込)



九州地方の自動車産業

“カーアイランド九州”復権への布石

畠山 俊宏 (経済学部准教授) 共著
晃洋書房 / 5,060円 (税込)



野暮は承知の落語家論 人生と芸の交差を読む

工藤 保則 (社会学部教授) 著
青弓社 / 2,640円 (税込)

*



初めての栄養学研究論文 第2版

人には聞けない要点とコツ

石原 健吾 (農学部教授) 共著
第一出版 / 2,860円 (税込)



ナイジェリアを知るための56章

落合 雄彦 (法学部教授) 共編著
明石書店 / 2,640円 (税込)



臨床医学

—疾病の成因・病態・診断・治療 第3版
人体の構造と機能および疾病の成り立ち

楠 隆 (農学部教授) 共著
医歯薬出版株式会社 / 4,070円 (税込)



詩人の場所、星々の時間

関西マルメ研究会二十周年記念論文集

國重 裕 (経営学部教授) 共著
水声社 / 7,700円 (税込)



クリエイティブツーリズム論

ツーリストとコミュニティの共創プロセス

竹谷 多賀子 (経営学部准教授) 著
水曜社 / 2,750円 (税込)



修訂増補 近代日本宗教研係法令集成

藤原 正信 (龍谷大学名誉教授) 編集代表
嘉戸 一将 (文学部教授) 解説
すずさわ書店 / 55,000円 (税込)

広報誌「龍谷」

ショート動画メディア「VOiCE」

龍谷大学は創立400周年を迎える2039年の将来ビジョンとして、「「まごころ～Magokoro～」ある市民を育み、新たな知と価値の創造を図ることで、あらゆる「壁」や「違い」を乗り越え、世界の平和に寄与するプラットフォームとなる。」を掲げています。

このビジョンを体現するコンテンツとして、市民の悩みや迷いについて解決の視点・糸口を探るショート動画メディア「VOiCE」を新たに公開しました。

悩みや迷いは一般公募しており、その聞き手として、2025年4月から本学客員教授に就任した宇宙飛行士の土井隆雄さんが出演しています。大きなスケールの視点と経験、そして一人の人間としての温かさをもって、誰もが抱える悩みや迷いに答えます。



龍谷大学Webサイトトップページ及び公式Youtubeチャンネルで公開しています。

「VOiCE」Webページ

<https://www.ryukoku.ac.jp/voice/01/>

質問は、個人情報保護のうえ本学学生が選定しています。
質問選定・撮影の舞台裏については以下の記事をご覧ください。
<https://retaction-ryukoku.com/3489>

デジタル版広報誌「龍谷」リニューアル

情報発信の充実を目的として、広報誌「龍谷」のデジタル発信をリニューアルしました。

デジタルパンフレット形式は、これまでどおり発行時よりご覧いただけます。

あわせて、101号以降は記事ごとにWebページでも閲覧いただけるようになります(4月中旬公開予定)。

誌面とあわせて、Webでも龍谷大学の今をお楽しみください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/101/>



広報誌「龍谷」101号読者アンケート&プレゼントのご案内

今後の広報誌づくりのため、皆さまのご意見をお聞かせください。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選でご希望の読者プレゼントが当たります。お寄せいただいた感想・近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

締切 2026年6月30日(火)

Web応募フォーム

<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>



龍谷ミュージアム ベア招待券…10組20名様

読者プレゼント

ハガキでご応募の方は、ご希望のプレゼント名を明記したうえで、住所・氏名・年齢・職業・電話番号・(龍谷大学卒業生は卒業年度・学部)および広報誌「龍谷」の感想・意見、近況などを書き添えてご応募ください。

※いただいた個人情報は広報誌「龍谷」の編集以外の目的には使用いたしません。

読者アンケートのあて先

龍谷大学 学長室(広報)

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075 (645) 7882 FAX 075 (645) 8692

E-mail: kouhou@ad.ryukoku.ac.jp



オリジナルブレンドコーヒー
ドリップパック2種セット…10名様

農学部生が開発したコーヒー「ROOT」と「LEAF」を2種類セットでお届けします。

読者のひろば

年に2回の龍大からの広報誌は、懐かしさだけでなく、チャレンジする心も掻き立ててくれるので、感謝しています。(卒業生Nさん)

卒業して長い年月が経ちました。この報せで自分の原点、源流を確認しています。(卒業生Oさん)

広報誌「龍谷」のデジタル版配信について

広報誌「龍谷」はデジタル版でも閲覧いただけます。

下記URLまたはQRコードからメールマガジンにご登録いただくと、デジタル版発行のご案内をお届けします。

冊子の送付停止を希望される方はフォームからご申請ください。

広報誌「龍谷」メールマガジン登録・冊子送付停止申請

<https://www.ryukoku.ac.jp/prdigital/>



広報誌「龍谷」デジタルライブラリー
(過去の広報誌もご覧いただけます)

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/>



編集委員：山崎 正幸、木村 睦、野呂 靖、松永 敬子

事務局：東山 加奈子、谷 穂乃美

広報誌「龍谷」101号

2026年3月18日発行

編集：広報誌「龍谷」編集委員会

制作：龍谷大学 学長室(広報)

発行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075 (642) 1111 (代表)

龍谷大学ホームページURL

<https://www.ryukoku.ac.jp/>





公式 X 「龍谷大学広報」

[X.com/ryukoku_univ_pr](https://x.com/ryukoku_univ_pr)



公式 Instagram 「龍谷大学」

www.instagram.com/ryukokuuniversity



公式 Facebook 「龍谷大学」

www.facebook.com/RyukokuUniversity/



公式 YouTube 「龍谷大学」

www.youtube.com/user/RyukokuUniversity